

産学官協働による葛西臨海公園鳥類園保全活動と取組の全国発信

1. 葛西臨海公園の自然の回復と希少な野鳥「ヒクイナ」の繁殖確認

現在、葛西臨海公園が位置する江戸川区南部は、1960年頃までは干潟が広がる豊かな海であったが、1972年、都市開発に伴い水没した土地を陸地化し、自然の保全と回復を図ること等を目的に「葛西沖開発土地区画整理事業」が計画され、その一環として1989年に公園が開園した。公園の東側に位置する鳥類園は、多くの野生動物が生息するまでに回復したエリアである。東京都公園協会では、2002年4月より公園の管理を受託して以来、湿地環境を回復・保全するための活動を継続してきた。

鳥類園に生息する「ヒクイナ」は、湿地を好む野鳥である。近年は生息環境の悪化から全国的に減少傾向にあり、東京都レッドリストで区部絶滅危惧IA類、環境省レッドリストで準絶滅危惧種に指定されている。東京都23区内で湿地を有する他の公園では、冬季に数日のみ確認され、越冬することはまれな野鳥であったが、鳥類園では2017年以降毎年秋に飛来し越冬する様子が観察された。さらに、2019年には東京23区内では唯一となる繁殖を確認した。ヒクイナは、広範囲で良好な湿地が保たれている指標となり得るため、本種を調査・保全することとした。しかし、警戒心が非常に強く、1日のほとんどを湿地の中で過ごすヒクイナは、目視での調査が非常に難しいため、生態について先行研究が少なく、保全に際して不明な点が多かった。本件ではヒクイナの調査を通して実施した鳥類園の湿地保全と普及啓発並びに取組の全国発信について報告する。(写真-1)

2. 葛西鳥類保全委員会による産学官協働での鳥類園の湿地保全活動

造成後30年を超えた節目とともに、2018年に葛西海浜公園がラムサール条約登録湿地に指定されたことを契機として、ヒクイナ等湿地に生息する動植物を通して、都が造成時に目指していた自然の回復状況を調査し、鳥類園の湿地保全に繋げるため、2020年に「葛西鳥類保全委員会」を設立した。委員会は、調査結果や専門知識を理解し植生管理や普及啓発に繋げられるNPO法人生態教育センター、動植物の生態及び周辺環境との関連について専門的調査と学術発表ができる東京都市大学と、葛西臨海公園の産学官協働で構成し、それぞれの長所を活かして、公園だけでは不足している専門知識やノウハウを補った。



写真-1 ヒクイナ

3. 取組内容と成果

3.1 生態調査を通じたヒクイナの繁殖確認

生態調査のため、鳥類園内にて、センサーカメラと録音機を最大6台設置、ヒクイナの声を通して反応を確認する「コールバック」方式による調査、繁殖期終了後に巣の探索調査を実施した。(写真-2)

センサーカメラで撮影した合計約400日分の画像を解析した結果、鳥類園内で初めてヒナの撮影に成功し、2020年は3ペア11羽のヒナを、2021年は1ペア2羽のヒナを発見し、ヒクイナの繁殖を確認した。複数ペアの繁殖確認から、



写真-2 コールバック方式による調査

これまで実施してきた湿地環境を回復・保全する活動により、良好な湿地が広い範囲で保たれていたことが確認された。

3. 2 生態に配慮した植生管理による3年連続繁殖確認

生態調査により、鳥類園におけるヒクイナの繁殖時期が判明したため、ヒナが発見された2020年から、繁殖の可能性が高い湿地において、より繁殖に適した環境になるよう、巣作りと身を隠すことに適した草丈等にするを管理目標にした。冬の泥掘りの面積拡大や、春の繁殖初期等影響が出やすい時期は草刈を控える等、ヒクイナの生態に配慮した植生管理を継続実施した。夏季は見極めが難しいヒクイナの繁殖終了と草刈の開始時期が重なるため、最新の調査結果を基に慎重に判断し、併せて、湿地に生息する他の動物や、観察窓からの視認性も考慮し、試行錯誤した結果、意図した通りの環境にすることができ、3年連続の繁殖確認に繋がった。(写真-3)



写真-3 植生管理（泥掘り）

3. 3 来園者への普及啓発

鳥類園の湿地の大切さを伝えるとともに、公園の希少種保全活動への理解に繋げるため、委員会による調査・保全活動を来園者へ紹介した。調査結果を盛り込んだセルフガイドと動画を作成し、公園のTwitter等で発信した他、鳥類園ウォッチングセンター前でのポスター展示、鳥類園スタッフによるその場でのガイドや観察会等を実施した。



写真-4 ヒクイナシンポジウム

3. 4 取組内容の全国発信

専門家と意見交換をするため、ヒクイナを含むクイナ類について、学会誌、博物館報、日本全国の調査記録、動物の保全活動をしているNPO法人の記録等の多岐にわたる資料から、数少ない先行研究と関連事例を調べた。発見した論文や報告書の著者と連絡を取り、承諾をいただいたヒクイナの研究者やクイナ類の繁殖に知見がある専門家（福井市自然史博物館、NPO法人動物たちの病院沖縄）を招聘して、2021年2月、委員会の2020年の活動成果を発信する、ヒクイナを対象にした日本初のシンポジウムを開催した。(写真-4)

また、2021年3月に第68回日本生態学会大会、2021年9月に日本鳥学会2021年度大会で、それぞれポスター発表を実施し、全国の野生動物の研究者等へ、先行研究が少ないヒクイナの貴重な調査結果と、ヒクイナが繁殖・生息する鳥類園の湿地の重要性を広く発信した。

4. 今後の展望

指定管理者として、協働団体と現場で密に連携し、新たな資源の発見から調査の実施、及び、調査結果に基づく植生管理・普及啓発・学会発表にいち早く繋がったことで、ヒクイナが繁殖できる程、広範囲で良好な湿地を継続的に保全したことが成果である。今後も産学官協働により、東京都の湿地保全の取組を全国に発信し広めていく。

具体的には、ヒクイナ保全活動継続に加えて、新たに、ヨシゴイ（東京都レッドリスト区部絶滅危惧IA類）、魚類や水生昆虫等水辺に暮らす動物等を対象に、産学官協働で実施する保全活動を充実させることで、鳥類園のさらなる湿地保全に繋げる予定である。また、公園近隣幼稚園への出張プログラム等、子どもたちへ向けた普及啓発や環境教育を充実させることで、生きものと触れ合いながら学べる機会を増やし、未来を担う子どもたちへ鳥類園の湿地の大切さを伝えていく。